

# 人やものとのかかわりの中で自分を見つめていこう

—第5学年「ヒロシマ」の実践から—

川口万里

## 1 はじめに

世界中に原爆の恐怖と廃絶を訴え続けている「ヒロシマ」は、「命」について真正面から向かい合うことのできる主題である。今までの自分の生き方をふりかえり、今後の自分の生き方を探っていくとする時、「人として」という大きな方向性で自ら考え学ぼうとする力を着実に養っていくことができる。また、学習過程における様々な人やものとの出会いやかかわりには、大きな効果が期待できる。その中で今の自分を見つめ、平和の喜びを実感し、命の大切さに気付いていってほしい。

子どもたちは、「広島市」に住んでいるという地域性を最大限に生かした学習展開を主体的に工夫していくことが可能であろう。例えば、55年前のあの日のできごとを知る家族や身近な人などに、直接聞きたいことをたずねる、平和公園や平和記念資料館または戦争の爪痕の残るその他の場所を訪れてみる、などである。映画や童話、マンガ「はだしのゲン」を通しての知識にとどまっている子どもたちにとっては、もっと視野を広げ、深く考えるきっかけにもなっていくであろう。

学習場所は、学校の教室（クラスやグループ）、図書室やインターネット（個人）、ホール（学年）から、平和記念資料館や各家庭など学校外に向けて多様な場の設定が工夫できる。そして、そこでは先生と子ども、保護者、戦争を体験した人など多くの人々との出会いが考えられる。そこでは、相手の思いを知ろうとし、自分の思いを語ろうとする姿勢を大事にしていきたい。さらに、様々な立場の「人」の思いに気づき、自分なりの考えを深めていくことを大切にして学習を深めていきたい。今回は、PTC活動をこの学習の中に組んだ。保護者と子ども、教師が、同じ場を共に経験することによって、「ヒロシマ」に対して共感し、互いに感じたことを語り合うことができるこの機会を生かしていきたい。

この学習では、過去の事実を知っていくことが必要である。しかし、どんな知識を得たかということが大切なのではなく、それをもとに自分はどう感じ、どう考えたかと自分の内面を見つめていくことが最も重要な学びの道筋となる。そこで、各自が疑問を持って調べたことや自分の思いをメモしたりノートに書いたりしたものを、ファイルに綴じていく。このファイルは、第6学年の「旅の学習」（沖縄を見つめて）を経験していく際、「ヒロシマ」を出発点に「オキナワ」との新たなかかわりのきっかけを見出していく大切な「もの」となる。

## 2 「ヒロシマ」の実践について

### (1) 活動のねらい

◎ヒロシマを見つめることにより、「命」に目を向け、自分の思いを表現することができる。

◎他人の思いにふれ、さらに自分の思いを深めたり、広げたりすることができる。

### (2) 学習の流れ

●第1次：2時間

オリエンテーション

○『折り鶴』を歌う。

○自分の身近な「ヒロシマ」を知ることを通して、命を大切にすることについて自分自身の考えを深めていくという学習の流れを確認する。

○55年前の東雲小学校の様子を知る。

(資料・・・東雲附小百年史・被爆建物)

○「ヒロシマ」について、今自分が知っていることを書き出してみる。

○自分がもっと知りたいことや調べてみたいことを書く。

●第2次：3時間

「ヒロシマ」について調べよう

○各自で、家庭で聞き取りをしてくたり、図書を調べたりする。

○自分で調べたことの中で、あいまいな点や情報が得られなかった点を整理し、平和記念資料館で得たい情報の要点をまとめておく。

●第3次：3時間

平和公園（平和記念資料館）へ  
（PTC活動）

○事前に、保護者に「みんな生きてきた 戦後50年」(朝日文庫)を紹介する資料を配付し、語り部西名先生について知っていただく。

○西名洋子先生のお話を聞いて、平和記念資料館を見学し、自分の知りたかった情報を得たり、さらに興味を広げたりする。

○今までの学習をふりかえりながら、自分が今「どう感じているか」、慰霊碑の前で自分を見つめてみる。(55年前のヒロシマの町を思い浮かべ、現在の自分や自分を取り巻く環境を見つめ直してみる。)

語り部の方の話の概要

- ・当時小学5年生だった西名先生の生活の様子
- ・原爆に遭ったお兄さんの死を看取った時のこと
- ・原爆投下後の広島の様子、小学校が避難所になっていた様子など

●第4次：3時間

自分の思いをみんなに伝えよう。

○自分が思ったことや考えたことをまとめ、伝えたい相手を想定して手紙を書く。

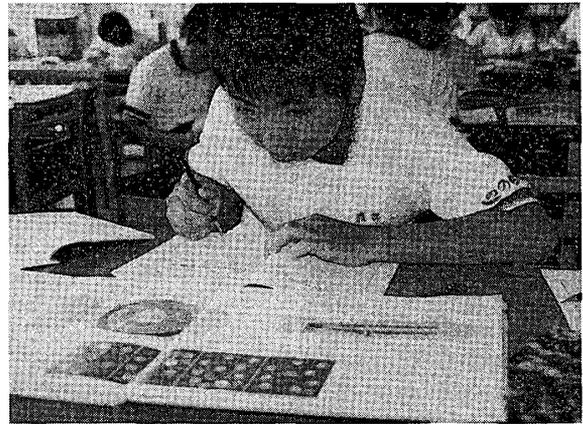
○学習をふりかえって、自分の考えや思いを作文にまとめる。

○語り部の西名さんにお礼のお手紙を書く。

○おうちの方にも感想を書いていただき、自分のファイルに綴じておく。

### 3 多くのかかわりの中で

本校の敷地内にある実習棟は、被爆建物である。また、被爆アオギリも保健室前に植えてある。このように、戦後55年を経ても身近なところに戦争の爪痕が「もの」として残っている。これらをつきかきにして、この学習を始めていった。



ほとんどの子どもたちは、原爆について知っており、過去の出来事に強い関心を持っていた。しかし、遠いところでのできごとのように感じ、身近に起こった現実のできごととしてとらえることができている子どもが多かった。中には、恐怖心が先立ち目をそらしたい子どももいたであろう。そこで、平和を願う歌「折り鶴」を歌い、みんなで落ち着いた雰囲気と真剣に考えていこうとする気持ちをつくっていこうと働きかけていった。また、冷静に勇気を持って「ヒロシマ」の学習に向かっていく心構えを持つよう声かけをした。

今回の実践で大きな役割を果たしたのが、語り部の方との交流である。その日初めて出会い、1時間お話をさせていただくという場であった。静まりかえったホールの中では、食い入るようにまっすぐな目で聞き入っている子どもたちの顔、涙をふきあいづちを打ちながら子どもたちを見守るように参加して下さったたくさんの保護者の方々の姿を見ることができた。寄せていただいた感想からも、親子で学習する場を持ったことによって、家庭で語り合い互いの思いにふれ合う機会を持つことができたことがわかった。

学習の流れの中で、クラスを越えて互いの思いを聞き合う場を持ったことも、子どもたちの相互理解と共感を広げていく上で成果があった。

先日、語り部の方から子どもたちへお手紙をいただいた。それは、お話を聞いて子どもたちと保護者の方が書いた感想を読まれてのお返しのお手紙であった。そのお手紙を読んで、子どもたちは2カ月前のPTCでの経験を鮮明に思い出し、さらに自分の考えを深めていくことができた。語り部の方と子どもたちの、心のキャッチボールがしっかりと感じ取れた。そして、語り部の方のやさしい思いやりの気持ち、平和を守り広げていくための熱い心を知って、子どもたちは明るい希望にあふれる21世紀に向かって力強い決意を持つことができた。

#### 子どもたちの感想より

- 私は実際2回、平和記念公園に行った。そして、当時生きていた人の話を聞くことができた。知らなかった。多くの人のいかり、悲しみを心で感じた。もう絶対命はすててはいけない。そう思った。～中略～この無惨なことを、また、未来へ伝えていきたい。まだ、行ったことのない人、ぜひ行ってほしい。私は、ここで思ったことを、今から、世界の人へ伝える。そして、これを未来の人へのメッセージにしたいと思う。
- 西名先生からの手紙を聞いて、再度『自分にできることはないか』と考えました。～中略～私なら、殺されたって戦争をやめさせるでしょう。21世紀には、戦争、人を殺すということをなくすために私は、自分にできることをやっていきたいと思います。

#### 4 おわりに

今後の課題としては、子どもたちが平和や命を大切にするために「私たちにできること」という視点での考え方をもっと追求していきたい。そのためには、もっと多くの情報を得たり、様々な活動をしている人々に出会ったりする必要があるだろう。そして、子どもたちが自ら自分たちの考えを行動に起こしていくところまで場を設定するなどして、この学習をより充実したものにしていきたい。